



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第46号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2013-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73597
Type	journal
File Information	DRFmonthly_46.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第46号

No. 46 November, 2013

- 【特集1】オープンアクセスウィーク！みんなの活動＜速報＞
【特集2】世界の学位論文電子公開の状況—ETD2013参加レポート—
【連載】今そこにあるオープンアクセス
「グリーンだからといって雑誌をキャンセルしてもいいか？」
【寄稿】Portable peer-reviewの試み

Open Access Week!! みんなの活動＜速報＞



静岡大学
OAWポスターを持つしずッピー



広島大学
階段面にOAWポスター



滋賀医科大学 図書館カウンター
にポスターを貼っています。



筑波大学 博士論文公表に関する
講演会を開催



東京歯科大学 OAWのポスター、
Tシャツ、しゃもじとともに



北海道大学
英文論文執筆セミナーにてOAトーク



岡山大学 名前が「フクロン」に
決まりました！

○ Flickr アルバムもチェック！
<http://www.flickr.com/photos/drifmuseum/sets/72157636235661034>

○ DRF-Wiki で、みんなの力作素材を
配布しています。
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?oaw2013>
「今年はできなかった」という方も、
ぜひ来年チャレンジしてみては？



旭川医科大学
サイエンスカフェを開催☆

特集では、香港で開催されたETD2013に参加し、口頭発表を行った筑波大学附属図書館の中山知士さんに、会議の内容について報告していただきます。

世界の学位論文電子化公開の状況 – ETD2013参加レポート



会場の香港中央図書館

9月23～26日に香港で開催された第16回ETD国際会議（ETD2013）に参加し、日本の学位規則改正とその影響について口頭発表を行った。

ETD（Electronic Theses and Dissertations）は、PDFをはじめとする電子ファイルの形態で発行される電子学位論文のことである。ETDの普及などの諸活動を行う国際的な組織、NDLTDが毎年開催しているのがETD国際会議（シンポジウム）であり、香港大学図書館との共催で初めてアジアで開催された。

- ETD2013 <http://lib.hku.hk/etd2013/about.html>
- NDLTD <http://www.ndltd.org/>



日本では4月に改正学位規則が施行され、ETDの公開が制度的にスタートしたところである。このタイミングで、ETD国際会議のような場で他国のETDの状況を知り、また日本の現状を発信することは非常に重要だと考えた。

会議中のセッションは複数の部屋に分かれて行われたが、25日の「National Initiatives」セッションで、アラブ諸国の報告を行ったオマーンの発表者と時間を分け合い、日本の状況を報告した。

“The Possibility of Networked Electronic Theses in Japan”と題して、4月の前後で状況がどう変わったか、今後どのような可能性があるのかについて、下記の流れで発表した。

1. 日本の大学数、博士学位論文数、機関リポジトリ数の概況
2. 博士学位論文に対するオープンアクセス・イニシアティブ（＝学位規則改正のポイント）
3. インフラとしてのリポジトリ・コミュニティの活動
4. 日本における電子学位論文ネットワーク形成の利点
5. オープンアクセス、リポジトリ・コミュニティの広がりへの影響



各セッションの発表資料はETD2013のサイトで公開されている

特に3.では、リポジトリ・コミュニティとしてDRFの存在、ワークショップや研修などの活動などについても説明した。セッションには約40名が参加していたが、発表後には

- ・公開したくないと言われた場合はどうするのか
- ・公開状況は誰かチェックするのか
- ・日本語で書かれた学位論文もあると思うが、そのような論文のメタデータは、可視性を高めるために複数言語で記述されるのか

といった質問を受けた。またセッション時間以外でも、「今回の改正では、日本政府として背後にどのような考えがあるのだろうか」という質問もあり、今回の日本の学位規則改正に対する関心の高さがうかがえた。



世界の状況

インド

インドにおけるETD登録のためのETDリポジトリと政府イニシアティブの分析 Dinesh K. Gupta氏 (Kurukshetra University)

INFLIBNET (Information and Library Network) がリポジトリ“Shodhganga”を設立し、ETD提出のガイドラインも発表していた。2009年には大学認可委員会 (University Grants Commission : UGC) が修士・博士の最低基準と学位授与手続きの規則を策定し、Shodhgangaへの学位論文電子版の登録を義務とした。だが現状では、Shodhgangaに登録されている学位論文は、数大学の過去遡及分がメインということである。登録には大学がINFLIBNETとのMOUに署名する必要があるが、636大学のうち133大学の署名しか得られていない。

各大学では、図書館・教員組織・審査組織など、どこがETDプログラムを実行し維持していくかの決定ができないケースがあり、また著作権処理や、ETD作成のためのインフラの充実、研究者に対するETD作成のトレーニングなど、他に求められることが多く存在する。その結果、各大学はETDプログラムの開始よりも遡及分の電子化に時間をかけている。Gupta氏はこのような状況を「混乱状態」と表現していた。来年のETD会議では続報が報告されるだろうか。

Shodhgangaについては月刊DRF第44号の特集でも吉植庄栄氏に取り上げている。読み方がわからなかったのでGupta氏にゆっくりと何回も発音してもらい、「ショードガンガー」と読むことがわかった。ガンガーはガンジス川のこと、リポジトリの末長い発展という希望が込められているようだ。

●Shodhganga <http://shodhganga.inflibnet.ac.in>

香港

IRからCRIS (Current Research Information System)への移行 David T. Palmer氏 (University of Hong Kong)

香港全体の状況ではなく香港大学の事例だが、機関リポジトリからの進化の形ということで報告する。香港大学のリポジトリ“HKU Scholars Hub (Hub)”は、CRISへの変化を選択した。CRISは研究者、プロジェクト、組織、成果物のような研究情報を広め、アクセスさせる情報ツールであり、研究者や組織、企業などは様々な情報を取得できる。

DSpaceベースのHubは2005年、研究者の著作のオープンアクセス公開を目的としてスタートした。2009年に学内でKnowledge Exchange (KE) プログラムが始まり、香港大と関係コミュニティとの研究・技術の交換が開始されたことで、研究者からの関心も集め始めた。香港大はイタリアのCINECAとパートナーシップを結び、CRIS用のモジュールを組み込んでHubを強化していった。Hubは学内外の様々なデータを取り込み、画面に表示させている。学位論文に注目すると、データとしては指導教員 (研究者ページへのリンク付き) も表示される論文があり、また論文ごとにDOIを取得して、アクセスしやすい環境を整えている。

なぜIRからCRISへの移行を決めたのか。CRISなら著作以外の研究成果が記述でき、研究成果全体がはっきりする。紙の本への関わりが少なくなりつつある中で、CRISによって図書館が大学全体をよりサポートできること、なによりE-ScienceやE-Researchといったデータを重視した研究が進んでいることが理由として挙げられていた。

●The HKU Scholars Hub (香港大学学術庫) <http://hub.hku.hk>

ETD2013の開催に合わせるように台風19号 (Usagi) が香港を直撃した。上記香港大学のセッションも本来はボツワナの事例報告が予定されていたが、台風の影響で発表者が来られずに変更になったものである。その他のセッションも含め会議スケジュールは毎日変更されたが、貴重な体験となった。すでにETD2014は英国で開催 (Leicester大学主催) と決まっていたが、会議最終日にはETD2015のインド開催 (Jawaharlal Nehru大学主催) もアナウンスされた。

●ETD2014 <http://www2.le.ac.uk/library/etd2014>



中山知士 (筑波大学: 写真右)
カンファレンスディナーで、会議組織委員会チエアである香港大学図書館のPalmer氏とデュエットするひとコマ。なお今回のETD2013への参加は、国立大学図書館協会の海外派遣事業の助成によるものである。今年度、この事業での海外派遣者は、SNSやブログなどで渡航中や渡航前後のレポートを行っているの、報告者分と合わせて参照されたい。

●国立大学図書館協会 海外派遣事業 <http://www.janul.jp/j/operations/overseas>

9月16日、[GOALメーリングリスト](#)で激しい論争が巻き起こった。きっかけとなったのは、ユタ大学図書館のリック・アンダーソン（本稿執筆時の情報では、10月末来日し、図書館総合展のフォーラムに参加予定）が投げかけた「エンバーゴなしのグリーンOAを許可している雑誌のリストを簡単に入手できないか？予算がないのでキャンセル対象にしたい」という投稿である。

もちろん、グリーンだからと言ってその雑誌の論文がすべてOAになっているとは限らない。すぐにこの点を指摘されて、アンダーソンは「十分な割合のコンテンツが無料で入手できると判断されれば」と条件を修正している。

これに対して、今そんなことを公言すれば、グリーンだった出版社がセルフアーカイブを禁止したり、長期のエンバーゴを設定したりするようになってしまう、と猛反発したのが、例によって、スティーヴン・ハーナッドである。セルフアーカイブされている論文がまだまだ少ない現時点でのキャンセルは時期尚早で、

OAの発展を阻害するというわけである。彼は自分のメッセージに「[図書館コミュニティはOAの敵か味方か？](#)」という刺激的なタイトルをつけて強い反対を表明する（その前に、「図書館予算の問題はOAには関係ないから図書館のメーリングリストでやってくれ」「それは検閲だ」「検閲？個人の意見を述べただけだ」などといういささか大人げないやり取りもあった）。

図書館関係者からは、OAで入手可能な割合を確認する作業の煩雑さや、多くの雑誌がビッグディールに含まれていて単独でキャンセルできないことを指摘する声も上がった。

翌17日、電子ジャーナルの契約等を主な議題とする[LIBLICENSE](#)というメーリングリストで、モデレーターのアン・オーカーソンが「挑発的なやり取り([A provocative exchange](#))」としてこれらの議論を紹介した。以後、議論の場はLIBLICENSEに移ることとなる。

ここでは、グリーンでない雑誌こそキャンセル対象にすべきだとか、研究者は著者原稿では満足しないと

か、いやその大学にとって周辺的で著者原稿でも構わないものをキャンセル対象とするのだとか、そもそもグリーンOAは間違った戦略だとか、さまざまな主張が展開された。しかし、議論は次第に水掛け論の様相を呈してくる。

10月9日、オーカーソンはリック・アンダーソンの[最後のメッセージ](#)への注記で議論の終結を宣言する。彼女はこれまでの議論を総括した後、「さらなる現実的な証拠が出てきたら改めてこの問題を取り上げましょう」と締めくくっている。

（追伸）私事で恐縮ですが、10月1日から所属が首都大学東京に変わりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。もう一つ、奇しくも同日、本連載のタイトルとして拝借した『今そこにある危機』の原作者、トム・克蘭シー氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

栗山正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授。
デジタルリポジトリ連合アドバイザー。
Read & Researchmap
<http://researchmap.jp/read0195462>

Portable peer-reviewの試み

毎年1,500万時間が無駄な査読に費やされている。そう主張するのは新たな査読ビジネスを展開する企業、Rubriqである。Rubriqは顧客の論文を独自に査読し、査読者からの点数とコメント、おすすめの投稿先雑誌の情報等を添えて返却するサービス（有料）を行っている。その目的の一つは、投稿論文が却下されるたびに著者が別の雑誌に投稿しなおし、新規投稿先でまた新たに査読を行う、という現状の査読システムの無駄を減らすことにある。

論文が却下されるたびに何度も査読を繰り返す、という現状の無駄をなくす試みは、他にも様々に行われている。その一つはPeerage of Scienceである。同サービスと契約すると、雑誌編集部は査読の実施を同サービスに委託することができるが、査読結果は契約している他の顧客か

らも見られるようになる。そしてある雑誌への投稿論文が却下された場合、他の雑誌が著者に直接、自誌での掲載を働きかけたり、著者はその申し出を蹴って、さらに他の雑誌に査読結果とあわせて自分の論文を売り込むことができる。このように査読結果を持ち越せる仕組みのことは最近では"Portable peer-review"とも呼ばれ、注目を浴びつつある。

OA雑誌出版者で行なわれている「カスケード査読」も同一出版者内でのPortable peer-reviewと見ることができ。さらに最近では出版者を越えたPortable peer-reviewのコンソーシアムも出てきている。古くは2008年から活動している神経科学分野査読コンソーシアム等もあったが、2013年にはPLOS, eLife, BioMed Central, European Molecular Biology Organization (EMBO)の四者が同様

のコンソーシアムを組んだことで話題になった。四者コンソーシアムでは査読者は自分の査読結果を他の出版者に引き継がない、あるいは引き継いだとしても査読者の名を伏せるなどのオプションを選択できるとのこと、実際にどの程度有効に働いているのか（査読者の名がわからない査読結果は編集者にとってあまり参考にならない、という話もある）は不明であるし、技術仕様の統一の問題等もある。しかしうまくいけば、査読者・投稿者として研究者が無駄に費やしている時間を削減する、一助となるかもしれない。

佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>)
管理人。

<http://www.rubriq.com/>
<http://www.nature.com/news/company-offers-portable-peer-review-1.12418>
<http://www.peerageofscience.org/>
<http://nprc.incf.org/>
<http://blogs.biomedcentral.com/bmcblog/2013/05/24/peer-review-elif-e-goes-portable/>

<http://blogs.biomedcentral.com/bmcseriesblog/2013/06/11/portable-peer-review-to-prevent-a-pillar-to-post-process/>
<http://blogs.bmj.com/bmj-journals-development-blog/2013/09/06/will-portable-peer-review-make-science-more-efficient/>
<http://scholarlykitchen.sspnet.org/2013/07/15/game-of-papers-elif-bmc-plos-and-embo-announce-new-peer-review-consortium/>

次号予告：2013年 DRF 10大ニュース

○月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。
gekkandrf@gmail.com
月刊DRF第46号 平成25年11月1日発行 デジタルリポジトリ連合

○読者アンケート
ご意見・ご感想をお待ちしています。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

○Facebook やっています。
<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?月刊DRF>